

## 明治初期河原田盛美の来沖とその後の沖縄県における 夜光貝等貝殻類利用の変遷

The Change of the Turbo Use in Okinawa After the Visit of Moriharu Kawarada

國吉 まこも

KUNIYOSHI Makomo

### 要 旨

1875（明治8）年、琉球の処分を控えて明治政府より派遣された内務省役人の1人に河原田盛美がいるが、河原田は沖縄滞在中に、同所に産出する夜光貝殻に注目し、貝鉦原料として海外輸出を試みたところ成功を収めた。同貝殻は近代以前の沖縄では主に螺鈿の原料及び食用に供されてきたが、河原田の試みにより新たに海外輸出品としての地位を確立する。それ以降夜光貝殻は漁業者の採捕対象となり沖縄の島々各地で乱獲されるようになる。

本研究ノートでは近代以降の沖縄で換金性の高い物産として注目されるようになった夜光貝殻をめぐる人々の動き、同貝殻の採捕状況などを明らかにできないか試みるものである。

採捕状況については、「沖縄県統計書」等の沖縄県調査資料、「喜舎場家資料」等の八重山島役所調査資料等を見るに、夜光貝殻の採捕高は急減と急増を繰り返し、まさに乱獲状況にあったと考えられる。当局者らによる当時の調査報告にもまた乱獲を危惧する文言が見られる。次に、夜光貝殻をめぐる人々についてだが、これらの人々は大きく2つに分けられる。1つは採捕者である糸満漁夫ともう1つは取引業者である寄留商人である。両者を結びつけた要素は換金性の高い夜光貝殻であり、彼らが結びつくことにより、同貝殻を採捕する際の効率を上げるため「ミーカガン」と俗に呼ばれる水中眼鏡が沖縄で考案されたこと、各地での乱獲の結果、採捕漁場を年々拡大し、当時無人島であった尖閣諸島へまで漁夫が出漁したこと等を資料を通じて考察した。

【キーワード】 糸満、水産業、夜光貝

河原田盛美は琉球国から沖縄県へと変遷する時代の変わり目に、内務省の役人として沖縄（琉球藩）に赴任したうちの一人である。

『河原田盛美の琉球研究』 斎藤郁子著<sup>(1)</sup>によると、在沖時の河原田の活動は政治的な面に加え殖産興業方面に及び、その活動は「河原田の琉球研究の目的がどこにあったかを考えると、明治政府による統治を前提にした琉球の実態調査であり、物産調査であったと推測できる。」と、している。

明治維新による近代化は政治面で「琉球処分」と呼ばれる琉球国の廃絶と沖縄県の設置として具現化されたが、河原田の活動、物産面の調査が、その後の沖縄における産業等の事項にどのような影響を与えたか、特に夜光貝をはじめとする貝殻類に関する資料をいくつか取り上げて、今後の研究に活用できないか考えてみたい。

## 1. 河原田盛美著「沖縄物産志」ーヤゴ貝、一にヤクカヒ、又ヤコウカヒー

夜光貝は奄美諸島を北限とし、南西諸島に分布する貝でありサザエ科の中でも最大のものである。重厚な殻の裏側に真珠層があり、古くから螺鈿細工の材料として利用されてきた。

河原田が沖縄の物産研究についてまとめた資料として『沖縄物産志』<sup>(2)</sup>があるが、夜光貝殻について河原田の当時の視点を見てみたいと思う。

以下に「沖縄物産志：河原田盛美（1884年起稿着手）」より抜粋する。

介類 ヤゴ貝、一ニヤクカヒ又ヤコウカヒ、夜光貝俗、夜久貝俗、青螺

外面首方寶生ノ玉形ヲナシ尾ノ方半體丸クイボナリ内面丸型ニシテ内縁ニ繩形ノ高縁アリ内部ハ白質ニ淡薄藍色ヲ含ミ光澤美麗ナリ（略）

從來琉球ニテモ之ヲ注器青貝塗りニモ用ヒタレモ僅々タルモノニテ民家軒下ノ雨落ニ敷キテ敷石ニ代用シタルモ此肉ヲ食スル多量ナルヲ以テ各所ニ投棄シタルモノ堆積シタリシナリ

然ルニ明治八年盛美官命ヲ奉ジテ那覇港内務省公館ニ在勤シ此遺利ヲ挙ル事ヲ謀リ先ヅ之ヲ米国ノ萬國博覽會<sup>(3)</sup>ニ出品セシニ賞賛ヲ得タレバ在琉ノ鹿児島商人ニ諭シテ拾ヒ集テ神戸横濱ニ出シ外國ニ賣シ事ヲ以テスルモ當時在琉ノ商人等ハ之ヲ賤業視シテ應スルモノナシ

又東京ナル天野某ハ外國人ニ知人アルヲ以テ之ニ謀リ英國ヨリ鈕子製器械ヲ買寄セ製造セントヤコ介殼十俵ニ近五拾円ヲ添テ送りシニ彼甚不良ニシテ五拾円ノ金員及ヒ介殼迄ヲ売却シテ私用シテ音信ヲ通セズ茲ニ於テ余モ甚タ世上人心ノ輕薄ニシテ利用厚生ノ志アル人ナキヲ歎ジ居タリ

然ルニ内務省出張所ノ用達ヲセシ者ニテ谷口栄吉ト云モノ久シク鹿児島ニアリシカ適ニ下琉セシヲ以テ前後ノ始末ヲ出シ大ニ殖産ノ道ヲ説諭セシニ彼ハ事理ノ分別モアルモノニテ速ニ庸夫ヲ以テ各所ニ棄置キタルヤク介殼百余俵ヲ収集シテ之ヲ神戸港ニ輸送セシニ三百五拾余圓ノ利ヲ得タリシカバ彼モ引續キ輸送スルヨリ在琉商個等競争シテ買集ルニ至リ明治八年八月ヨリ同十二月マデニ那覇港ノ輸出調ヤク貝殼二万〇五十六メ八百目此原價千〇四拾七円八拾四錢ニ及ベリ爾來益中外ノ需要ヲ廣メ明治十三年十一月マデニ神戸大阪ノ両所ニ販賣セシヤク介殼代價三萬八十餘圓ノ多キニ至レリ（略）

○是ヲ捕ルノ法ハ概ネ内地ニテ蟹人カ石決明ヲ捕ルニ異ナラズ而シテ何レノ地ニテモ多少捕獲セサルハナシト雖モ糸満人ガ久米島ニテ捕ルモノヲ尤多額ナリトス（略）

河原田は、夜光貝の外見的特徴を述べたのちに、確かに従来「青貝塗」（螺鈿）の原料として使用されてきたものの、当時の琉球藩における利用状況は主に「食用」であり、その貝殻は至るところに廃棄されていたとしている。また河原田はこれら貝殻を米国万博に琉球物産として出品したところ好評を博したという。

東京の天野某なるものがすでにこの時期夜光貝を原料とする「ボタン」製造を試みていると河原田が記していることは興味深い。天野某の試みは残念ながら失敗に終わったが、沖縄県設置以降この貝は鈿原料として多量に海外輸出されることになるからである。

さて、記述によると河原田は在沖時に夜光貝殻の商業上の有用性を盛んに説いたが、彼の意見を汲むものは皆無であり、ようやく「谷口永吉」という琉球藩内務省出張所に出入りする御用商人が輸出を試み神戸港に送ったところ 350 余円の利益を得、そこから在琉商人の目にとまるようになり、明治 8（1875）年後半には同貝殻の那覇港輸出高が原価 1047 円を数え、更に明治 13（1880）年 11 月までにはおよそ 30080 円余りの貝殻が神戸大阪に送られ、また糸満人が久米島で捕る夜光貝が最も多額であるとしている。谷口という人物については、渡辺重綱著「琉球漫録」にその名が見える<sup>(4)</sup> ため、河原田が離沖後の 1878 年頃まで沖縄に滞在していたと思われるが、詳細は不明である。

さて、輸出金額の急増は河原田の着眼が正しかったことの証明である。「民家軒下ノ雨落ニ敷キテ敷石ニ代用シタル」「各所ニ投棄シタルモノ堆積シタリシ」夜光貝殻が神戸大阪に送れば金になったとしたら、こんなに楽な話はない。

なお、河原田は同じ頃、大日本水産会で夜光貝について報告している。「物産志」と重複する部分は割愛しながら、少しそちらも見てみたい。

以下に『琉球青螺ノ説』（1885、「大日本水産会報告第 43 号」小集会演説 pp. 12-16）より抜粋する。

#### 琉球青螺ノ説 在京會員 河原田盛美

（前略）此介ハ三十六島中之ヲ産シ島人皆ナ捕テ食用トス其捕法ハ潜捕ニシテ概子内地ノ海士ガ石決明ヲ捕フルニ似タリ捕獲期ハ七月ヨリ九月迄ヲ良期トス故ニ糸満村ヨリ三百人許ノ漁師（沖縄島ニハ此糸満村ト與那原灣トニケ所ノ外漁夫更ニナシ）ハ毎年七月ニ至レバ四十八里ノ海上ヲ渡リ久米島ノ離島ニ到リ之ヲ捕フルヲ以テ業トセリ其間ハ二三ヶ月ニシテ十月ヨリハ鰯及ヒ鰯ヲ捕フ

久米島ニ「ヤク」貝麴漬ノ名産アリ余程美味ナリ然レドモ多ク製スルコトナク皆ナ生鮮ノマ、那覇ニ出セリ尤モ漁夫ガ之ヲ捕ヘタルトキハ直ニ其介殻ニ穴ヲ穿チ繩ヲ通シテ多分ヲ連繫シ海中ニ投シ置キ幸便ヲ待テ輸送スルモノトス各地亦此ノ方法ニ依テ之ヲ貯ヘリ之ヲ食スルニハ酢貝又ハ煮付トシ肝腸マデヲモ煮食セリ其味内地ノ鰻ニ優ルトモ劣ルコトナシ。（略）

爾來年二月ニ其輸出隆盛トナリ遂ニハ軒下雨落ニ敷シモノマデ集ムルニ至リ又各島ヨリモ悉ク之ヲ出スニ至リタリ同年ヨリ明治十三年九月マデ琉球諸島ヨリ大坂神戸ニ出シタル青螺殻ノ代價ハ九万八千七百三十拾餘圓ノ巨額ニ登レリ（大坂問屋ノ調査ニヨル）。

明治十三年余ガ再ビ琉球ニ渡航セシトキハ那覇ニテ「ヤク」介殻一個ノ代價三錢乃至四錢ニ騰貴セリ然レドモ久米、慶良間島等ニテハ一個二三厘ノ相場ナリシヲ以テ兩島ニテ百餘俵ヲ購求シ尚ホ那覇ニテ百餘俵ヲ求メ之ヲ大坂表ニ積來リシガ當時大坂ニハ該介殻ノ賣殘リタルモノ三万俵餘アリ其賣行甚ダ悪シク漸ク運賃等ヲ差引キ元價ニ賣却セリ其底落ノ原因ヲ探求スルニ該介殻ノ火水ニカ、リタルモノヲ外商ノ嫌忌スルニ由リテナリ元來該介ヲ長ク淡水中ニ入レ置クトキハ其質變ジテ粉ノ如ク潰レ又火熱ニカ、リタルモノハ容易ニ破壊スルモノナリ此ノ如キ

品ハ百斤二十錢ノ低價ニテモ之ヲ買フモノナシ。

當時好良ノ品ハ百斤七八圓乃至十圓ニシテ一俵ハ貝數大約四十個、量目ハ凡ソ百六十貫目即チ百斤許ナリ又那覇ヨリ大坂マデノ運賃一俵四五十錢ナリシ。

以上ハ唯其概略ナリ尚ホ該介ニ就テ他日陳述スル所アルベシ。

この報告では河原田は夜光貝の採捕者（糸満村漁師 300 人程度）、捕獲時期（7-9 月にかけて）、採捕場所（久米島）、輸送方法（殻に穴を開けて生きたまま輸送）などを先の「物産志」よりも具体的に紹介している。

明治 13（1880）年 9 月までの輸送量が「物産志」の金額（凡そ 3 万円）から 3 倍以上（9 万円超）になっているのは、調査の方法が変わったのか不明だが、注目すべきは夜光貝殻の価格のくだりだろう。明治 8 年頃は「1 厘で 2、3 個」の相場が、「1 個 3、4 銭」というから、那覇における値段の騰貴は数十倍になろうか。にもかかわらず周辺離島の慶良間島では 10 分の 1 の値段で求められたというから、地域によって大きな価格差があったこと、また後で触れるが、最大の供給地になる八重山諸島に関する記述がないことから、この時期はまだ八重山まで採捕に行ける状況が整っていなかった、乃至は久米島等ではまだふんだんに採捕できた状況であったことが推察できる。また、品質が悪くなった貝殻も多く送られていたため、取引市場では最安値（100 斤 20 銭以下）と最高値（100 斤 7~10 円）には大きな差が生まれていた。

なお、この時期の沖縄県庁側の認識はどうだったのか、同県統計書明治 13（1880）年を確認したが、夜光貝殻の県外輸出状況がわかる統計などは記されていない。伊平屋島の輸出品目に「屋久貝 270」が記載されているものの「※売買ノ道未タ開ケス各自ノ要求ニヨリ現品ヲ以テ相交換ス故ニ価金詳ナラス」とある。

## 2. 明治 13 年以降の夜光貝等貝殻輸出

前項を振り返ると、琉球藩勤務時に河原田は夜光貝殻の海外輸出を試み、その試みは成功を収めた。1880 年再び来沖した際には、夜光貝が盛んに輸出され貝殻の価格は遥かに騰貴していた。価格の騰貴は乱獲を産んだものと思われるが、夜光貝の採捕はその後どのように変遷していったか、考えてみたい。

明治 13（1880）年以降の輸出量だが、「沖縄県統計書」に具体的な数が出てくるのは明治 19（1886）年度になるため、先に別の資料で夜光貝に関する記述を確認する。

八重山での採捕について、「八重山群島物産繁殖ノ目途」田代安定著（1885-1886 年にかけて主に八重山諸島を実地調査）には以下のように記されている。

夜光貝殻 目今其採集頗ル盛ニテ多ク坂地ニ輸出セリ宜ク之レガ永続方法ヲ設クベキナリ

明治 18（1885）年頃には八重山諸島でも採捕が盛んになっていたことが推察できる。「坂地」は大阪のことだろう。

また、明治 21（1888）年頃に沖縄県の水産状況を調査した松原新之助は夜光貝の採捕状況について『沖縄群島水産志』<sup>(5)</sup> に以下のように記している。



明治 20 (1887) 年度輸出 (那覇商議所調査)

物名	輸出数量	価格	送り先
イリコ 海參	4,220 斤	約 684 円	神戸大阪
スルメ 鰺	54,940 斤	約 2547 円	同上
丁貝 方言ヒーガイ		1 斤ニ付 1 銭	同上
長丁貝 方言イシヒーゴー		同上	同上
高瀬貝 方言タカジリ	20,940 斤	約 294 円	同上
スピ貝 方言スピナ			同上
夜光貝 方言ヤクガイ	219,620 斤	約 7773 円	同上

石垣島 附 武富島、黒島、小濱島、新城島 (上離、下離)、西表島、鳩間島

先島群島八重山列島中ニ在テ最モ大ナル者ハ石垣島ト西表島ニシテ其他ハ小島ノ散財スルノミ海岸地勢險悪殆ント石花礁ノ壁ヲ以テ之ヲ圍ムガ如シ

(略)

ヤクガイ (第十七圖)

八重山島近海ニ於テ最モ多クヤクガイヲ出ス處ハ石垣島ノ内安良、<sup>ヤスラ</sup>白保等ニシテ大抵一隻ノ漁船ヲ以テ一年ノ採獲三千個ニ至ルト云フ其殻一個ノ量ハ凡ソ三斤内ニシテ固トヨリ大ナル者ト爲スヲ得ズ (略) (介殻一斤ノ價近來三四銭ノ間ニアリ)

先島ニ於ケル、ヤクガイノ採捕ハ凡ソ七八年前ヨリ其業ヲ創メ近年愈々濫捕ノ弊ヲ生シ漸次相減少シ且稚小ノ者ノ外格外ノ大殻ヲ得ルコト稀ナリ其濫捕ノ弊殻經纔ニー二寸ノ者モ皆之ヲ採捕スルニ至レリ

ヤクガイハ常ニ海潮ノ激衝スベキ暗礁裏面ニアリ故ニ其栖息スルハ必ラズ突出シタル角地ノ當面等ヲ多シトス

採捕ノ期ハ正月ヨリ三月マデトス都テ夏期暖熱ノ候ニ於テハ介ノ磯邊淺處ニ寄ルコトナク採捕頗ブル難シ (略) 採捕期ニ於テハ凡ソ十一尋ヨリ十三四尋ノ水底ニアリ (略) 其採捕ハ別ニ術アルニアラズ裸体潜没シテ手之ヲ拾フノミ

(略)

余輩石垣島ニアリシハ舊歷七月ナリシガ此際恰モヤクガイ孕卵ノ時期ナルコトヲ認メタリ若シ後來該地方ヤクガイノ蕃殖ヲ保護セント欲セバカメテ此孕卵期ノ採捕ト稚介ノ濫捕ヲ謹マザルベカラズ

序ニ云フヤクガイ生産ノ地ニシテ余輩ガ此回確ニ知り得タルハ左ノ各島近海トス

七島ノ中 <sup>タカラ</sup>寶島、<sup>エラフ</sup>鬼界島、<sup>イ</sup>沖ノ永良布島、<sup>ケラマ</sup>伊平屋島、<sup>トナキ</sup>沖繩本島、<sup>イリオモテ</sup>久米島、<sup>アラグスク</sup>計良間島、<sup>クロ</sup>渡名喜島、<sup>イシガキ</sup>西表島、<sup>ハテルマ</sup>新城島、黒島、石垣島、波照間島等。

タカジリ (ニシキウツ *Trochus niloticus*, Lam.) (第十八圖)

タカジリハ最モ石垣島ノ近海ニ多ク其大サ經五寸至ル近來那覇港ヲ經テ内地ニ送り更ニ支那ニ輸出スル者稍々コレアリ但此介ハ敢ヘテ石垣島ニ限ラズ先島群島ハ言フニ及バズ沖繩本島及ヒ其附近諸島ノ近海ニ於テモ多少産出セザルコトナシ

スピナ (タカラガイ *Cypraca moneta*, L.) (略)

ヒーガイ (テフガイ) (第二十圖) (略)

アザガイ (車渠介 *Tridacna gigas*, L.) (略)

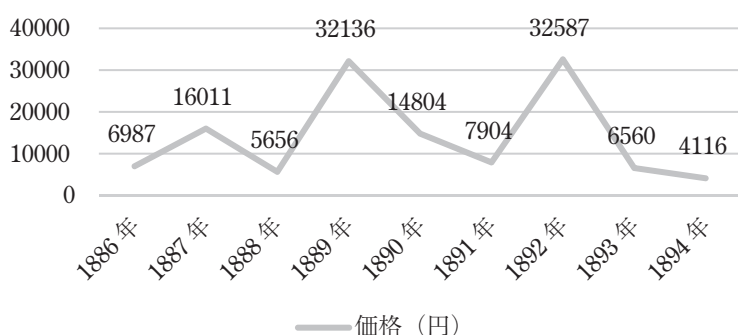
松原の記述によれば、先島における夜光貝の採捕は今（1888）より7,8年前（1880-1881）に始まった。八重山での主な漁場は石垣島の東岸にある安良、白保といった太平洋側に面した沿海だが、すでに乱獲の様相を呈しており、その採捕高は漁船1隻で年間3000個になること、また貝殻1個3斤に満たない小型のものが主で、そのためか夜光貝の当時の価格は100斤で3、4円が相場としている。

なお、採捕時期は前述の河原田の報告とは異なり1-3月となっているが、これは石垣島が久米島より南方に位置するための水温によるものだろうか。

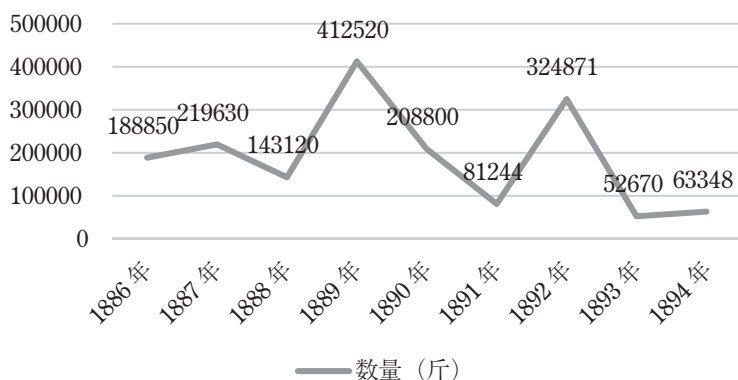
乱獲の状況を呈していたとはいえ、掲示している輸出海産物表によると輸出品目の中では数量・価格ともに第1位を占めている。

### 3. 「沖縄県統計書」にみる夜光貝殻取引

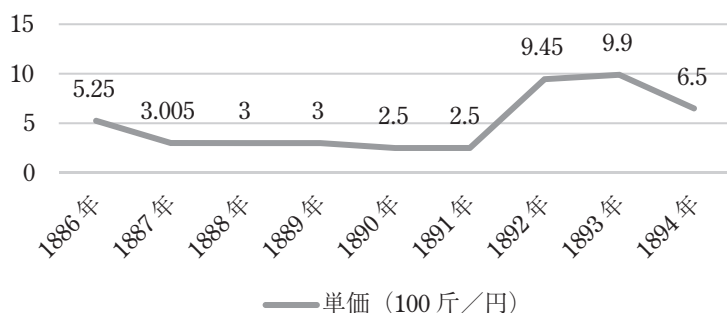
当時沖縄から海外へ輸出される夜光貝殻の取引はどのようなものだったのか、全体の輪郭を捉え



グラフ1 那覇港輸出（夜光貝）価額



グラフ2 那覇港輸出（夜光貝）数量



グラフ3 八重山における百斤あたりの平均取引価格（夜光貝）

ることができないか、「沖縄県統計書」<sup>(6)</sup> から夜光貝の那覇港輸出統計・および八重山での百斤あたりの平均取引価格を抜き出し、左にグラフを作成してみた。なお、統計書の表記で「夜光貝」として項目があるのは1886年から1894年の期間のみである。1895年以降は「貝殻類」として夜光貝を含むその他貝殻も合わせた数字で統計が取られている。

表を見るに、輸出量が急増した翌年は急減するサイクルを繰り返しながら、年々減少している。1888年に調査した松原は、当時すでに乱獲の様相を呈していると報告しているが、翌1889年には輸出量が急増している。おそらくは、新漁場の開拓により急増、乱獲の結果翌年の急減という流れと推測したいが、詳しいことはわからない。輸出総額も輸出量の増減と連動しており、限られた資源量に左右される取引であったと思われる。また八重山における夜光貝殻百斤当りの平均単価は1894年時には下落しているものの、基本的に右肩上がりである。

平均単価については、沖縄県統計書が記す八重山での価格とは別に、同書那覇港輸出統計における平均単価、および大日本外国貿易年表<sup>(7)</sup>から夜光貝殻（Shells, Conch or Yakugai）の項目の数値を参考に比較的取引期間の長いフランスとイギリスの価格を取り上げ、表1にまとめた。

表を見るに、那覇港の単価と八重山のそれとの差額が沖縄における取引業者の儲けと、ひとまず考えてみる。統計書で確認できる最初の1886年は八重山での価格が那覇のそれを上回るが、以降八重山での買取価格は低く抑えられている。特に1889-1891年の期間は八重山での価格の数倍の値段で那覇港から輸出されており、輸出量の多い1889年はかなりの差益になったように思える。が、1892年以降は差益に大きな差はなく、輸出量が下降していく中では、それほど利益になったか疑問が湧いてくる。実際に明治28年以降県統計書では、「夜光貝殻」という個別の項目は抹消され、新しく「貝殻類」という項目で統計がとられるようになっていく。

欧州への輸出について見てみると、英仏2国への輸出よりも那覇港における平均単価が上回る年（1887、1888、1889、1893）が複数年ある。これは先に河原田が報告したような「当時大阪には該介殻の売残りたるものあり」といった状態がしばしば起こっていたことを物語るものだろうか。なお、英仏共に取引量は年度が下るにつれ減少しており1897年の輸出量は英が224斤/32円、仏が5800斤/958円となっている。なお、各国の記録した輸出量のピークは英が1885年の凡12万6千斤、仏が1888年の19万7千斤である。

夜光貝の資源量が年々減少していったことは、沖縄県統計書、大日本外国貿易年表から判断できると思うが、それ以外の点、たとえば取引業者や仲買商がどのくらい利益をあげていたかなどの内情については、英仏への平均輸出価格と那覇港でのそれが逆に高額になるなど、困ったことに不明な点を確認した次第である。いずれにせよ、統計資料等の具体的な数値を着実に利用できるよう、周辺資料で補完できないか考えてみたい。

#### 4. 八重山島における夜光貝殻等の採獲状況

ひとまず統計資料からは離れて、八重山諸島石垣島における夜光貝採捕について、八重山島役所の文書の記述を見てみたい。

『農商書類』『喜舎場家資料45』<sup>(8)</sup>には、第3回内国博覧会（1890年）に八重山島より出品物の貝殻（夜光貝、アザ貝、高瀬貝）に関する添付の説明書が収録されている。（出品人は沖縄県八重山島石垣間切石垣村士族波照間某である。平民ではない）

以下、同資料より抜粋する。（※第一号は夜光貝殻、二号は高瀬貝、三号はシャコ貝）

産地並製造場 第一号（夜光貝殻）ハ沖縄縣管下琉球国八重山島宮良間切伊原間村字トムリ崎海、製造所ハ全島全間切登野城村一番地  
第二号（高瀬貝殻）ハ全縣全国全島大瀨間切真榮里村字タカダ海、製造所ハ全上

表1 夜光貝殻 100 斤あたりの平均取引価格

	八重山	那覇港	フランス	イギリス
1884 年			3.9	4.4
1885 年			4.2	4.4
1886 年	5.25	3.7	4.9	6.3
1887 年	3	7.3	5	3.9
1888 年	3	4	5	1.2
1889 年	3	8	6.6	6.9
1890 年	2.5	7.1	7.5	9
1891 年	2.5	9.7	9.6	10.4
1892 年	9.5	10		10
1893 年	9.9	12.5	10.8	10.6
1894 年	6.5	6.5	7.4	10
1896 年				6.6
1897 年			16.5	14.3

（単位は円。単価小数点 .0 以下は四捨五入。）

第三号（アザ貝殻）ハ全縣全国全島宮良間切鳩間村字南風バタ海、製造所ハ全上

（略）

採捕並器具 第一号ハ毎年一月ヨリ五月迄平穩ノ日ニ漁舟ヲ出シ海底（十二三尋ノ所）ニ之レアルヲ認メ潜入シテ採捕ス

第二号第三号第四号ハ干潮ノ時瀬上又ハ瀬下ニアルモノヲ取ルナリ

製造並保存 第一号第二号第三号ハ生肉ヲ搔取り殻ノ外部ニ固着セル砂石ヲ去リ貯藏ス

（略）

販路 沖縄縣管下琉球国那覇西村

販賣總計 一箇年販賣高夜光貝殻五千斤此代價金四百円

全高尻貝殻五拾斤代價金四拾錢

全アザ貝殻拾個此代價金壹円

（略）

産出並製造高總計

一箇年製造高夜光貝殻五千百斤 全高尻貝殻五拾五斤 全アザ貝殻拾貳個 （略）

第1号である夜光貝殻の記述だが、産地（漁場）は伊原間海岸であること、これは先の松原が報告した安良、白保の間に位置し、いずれも石垣島東岸の漁場である。また製造所というのは貝殻から身を抜き取る作業場のことだろう。同所は登野城村1番地とされているが、ここは大川村と登野城村の境目に位置する旧石垣港棧橋付近の海岸であり、目の前を先島航路の蒸気船が沖止めしていた場所である（現在の石垣市730交差点付近）。石垣島東海岸で採捕された貝殻は海端に集荷されたのちに、製造人らが一つ一つ身を抜き取り、外殻にこびりついた砂石を洗い落とし、那覇からの蒸気船を待っていたと考えられる。また、販路は寄留商人が多く店を構えていた那覇西村としていることから、在那覇の寄留商人相手の商売だったと考えてよいだろう。

夜光貝の1箇年の採取高は5千斤／400円とあるので、100斤あたりの価格は8円になる。松原の報告1888年（100斤／3.4円）から倍増しており、また沖縄県統計書の1890年（100斤／2.5円）よりもはるかに高額である。内国博に出品することを考えると、波照間某は高品質な原料を取り扱う取引業者だったかも知れない。

なお、高瀬貝についても取引価格が記されているが、50斤／40銭と、100斤あたりの価格で見ても夜光貝殻の1割程度の値段でしか取引されずその量にいたっては100分の1である。貝殻取引の主力は夜光貝殻だったと思われる。

次は、内地からの寄留人同士の貝殻売買についての契約書を見てみよう（明治25年8月7日付契約書「八重山島ニ於テ高瀬貝買入之義ニ付」『契約・指令等八重山事件ニ係ル書類』<sup>(9)</sup>より抜粋する）。

#### 契約書

八重山嶋に於て高瀬貝買入の義に付大浦清介と藤木外造との間に契約する事左如

第一条 大浦清介は高瀬貝七万斤別記の代価を以て藤木外造と現金引換にて取引する事  
高瀬貝百斤に付金五十銭 但身抜の事

第二条 藤木外造は前条の高瀬貝漸次を以て本年の九月五日迄に調達する事

第三条 大浦清介は高瀬貝買入の手附金として金五十円を藤木外造に渡置く事

第四条 大浦清介は手数料として金二拾二円を藤木外造に届出す事



第五条 高瀬貝受渡方は石垣島登野城海岸に於て取引之事

第六条 前条条之通り契約したるも万一違約したる時は損害賠償を請求する事

右の通り契約したる証として双方記名捺印し各自一通宛所有するもの也

明治二十五年八月七日 大阪北浜四丁目 山口忠七代理 大浦清介  
石垣島石垣村六番地 藤木外造

取引する貝殻は夜光貝ではなく高瀬貝ではあるが、売買契約の具体的内容が見て取れて興味深い。契約の日付は1892年8月7日、およそ一ヶ月後の9月5日には高瀬貝殻7万斤（凡そ42トンになる）を調達するという内容には驚かされる。受け渡し場所が登野城海岸とあるのは集めた貝殻を蒸気船にそのまま積みこむためだろう。また買い手の大浦が大阪の山口忠七代理と名乗っている点にも注目したい。大阪の貝殻輸出商が代理人を産地の石垣島に送り直接貝殻を買い集めていたとも考えられる。

次にそれから2年後に八重山島役所の調査でまとめられた『庶務書類綴下巻（水産）』（1894）「喜舎場家資料70」<sup>(10)</sup>からその後の夜光貝殻等の採獲状況（平良貝：ヒーガイ＝真珠貝と思われるが、の採獲の採取時期を県令でもって規制など）を見てみよう。

以下に同資料より抜粋する。

去ル明治十九年九月東京府華族 尚 典代理名護良岡ナルモノ宮古八重山両島ノ沿海ニ於テ試漁ノ許可ヲ得タルコトアリシモ、其業緒ニ就カズシテ已ミ、又明治二十一年中那覇寄留商人柳元平兵衛ナルモノ石垣間切川平湾ニ於テ水産繁殖所ナルモノヲ設置シ、専ラ鱒漁ニ従事セシモ是又半途ニシテ廃絶セリ爾来○今日ニ至ルマデ此種ノ事業ヲ計画スル考ナク漁利ハ拳ゲテ糸満村漁人ノ掌中ニ帰セリ。

然ルニ、是等ノ漁人ハ鋭意熱心其業ニ従事スト雖ドモ、惜哉。漁船漁具一切ノ器械完全ナラズ、規模亦狭小ナルガ故ニ鱒若クハ鰹之如キ漁撈ニ至テハ捕獲セザルニアラザレモ実ニ偶然ノ出来事ニシテ、其眼目トスル処ハ概ネ夜光貝、平良貝及海参等ノ類ナリトス。

尚此外雑種ノ生魚ヲ目的トスル磯漁アリト雖ドモ、是等ハ未ダ統計シ得ザリシヲ以テ、其採捕高不明ナラザレドモ、一ヶ年ノ売価大約四五百円ハアルベシト信ズ。

夜光貝、平良貝之如キハ価格甚ダ廉ナラザルガ故ニ、随テ濫獲之弊漸ク熾トナリ、現今大ニ其数ヲ減セシモノノ如シ。（平良貝ノ如キハ其数一年倍ニ減少スルノ○ヲ以テカ明治二十三年二月県令二十九号ヲ以テ其採取及○○○ヲ発布セラルニ至リナリ）故ヲ以テ近來荐リニ阿根久場島ノ如キ無人島ニ（本島ヲ西北ニ距ル凡九十三海里）大胆ニモ独木舟若クハ剝舟ニ乗り冒険的ノ遠航ヲ試ルニ至レリ然レドモ是等ノ海産ハ魚類ノ如ク繁殖セザルハ勿論、期節ニ依リテ出来スルモノニモアラザルヲ以テ年ヲ遂ゲ其数ヲ減少スルハ別紙統計表ノ現況ニ徴シテ明瞭ナリトス。

まず、八重山島における漁業については、専ら糸満村漁夫の活動によるものであること、彼らの「眼目とする処は」夜光貝、平良貝、海参（ナマコ）の類といった換金性の高い輸出品目であると記していること、を考えてみたい。先の河原田の報告では明治13年頃の糸満漁夫の主要な夜光貝の採捕場は久米島としていたが、その後彼らが漁場を拡大していったのだろうか。

そして、当時夜光貝、平良貝の価格が高騰しており、数が大きく減少していること（これは先の

表2 八重山島における 1891-1893 年度 100 斤あたりの平均価格表

年別	1893	1892	1891
夜光貝	9.9	9.9	5
平良貝	12	12	7
高尻貝	0.8	0.8	0.8

単位は円。(「庶務書類綴下巻」記載の八重山島役所調査による同島の貝殻輸出货量／価額より作成)

松原の報告も同様であったが)、そのため、平良貝は県令で以て対応策が取られたらしいこと、また夜光貝採捕のために石垣島西北に位置する無人島「阿根久場島」(これは当時の尖閣諸島の通称の一つである)にまで遠航するものが出てきたとしている。

表2は八重山島における 1891-1893 年の 100 斤あたりの貝殻平均価格である。価格差は平良貝、夜光貝、高瀬貝の順になっているが、夜光貝の取引価格はいずれの年度も那覇港でのそれを下回ることはない。また、この時期においても取引量の主なるものは夜光貝殻である(1893 年度／凡 11 万 8 千斤、1892 年度／凡 12 万 3 千斤、1891 年度／12 万 8 千斤)、(平良貝は 1893 年から順に凡 1 万 9 千斤、凡 2 万斤、2 万 6 千斤)、(高瀬貝は順に凡 9 千斤、凡 1 万斤、凡 6 千斤)。

なお、糸満漁夫による尖閣諸島への出漁は次の項で資料を取り上げてみたいと思う。

## 5. 夜光貝殻を求めて、尖閣諸島への出漁

1893 年に沖縄県を訪れ各地を実地見聞した笹森儀助は翌年『南島探験』を上梓したが、その中に糸満漁夫が夜光貝採捕のため尖閣諸島に渡島していることを記している。

以下に該当部分を抜粋する。(儀助、那覇滞留 1893 年 7 月 1 日の記述)

(一八九三年七月一日)

又曰ク近頃無人島ニ欺キ捨ラレタルモノ某々其状況那覇役所ニ届出アリ若シ無人島実況ヲ探ラントナラハ該役所長ニ面談シ其人ニ一見可然ト余直チニ役所長ニ面会シ遭難者四人ニ面スルヲ得タリ

本籍ハ山口県熊毛郡東村 花本勘助 年齢二十五才位

外三名(是ハ八重山籍球人也)本年雇主ニ欺レ無人島胡馬島(久場島共云)ニ棄ラレ米粒ヲ断ツコト十二日間也ト云フ一証ヲ懷ニセリ左ニ

一 胡馬島ニ於テ水陸ノ業ニ従事スル事

一 出稼中一ヶ月金二円給与ス

明治二十六年二月二十四日 元方雇主 鹿児島人 永井喜右衛門 印

同 松村 仁之助 印

花本勘助殿

花本云該島ハ八重山ヨリ六十里位亥子ニ当リ旧正月十四日石垣島出帆同十六日該島ニ着シ爾来「バカ」鳥ノ綿毛ヲ採ル業ニ従事シ後チ綿毛数十俵ニ充チタレハ雇主ハ之ヲ積テ飯米ヲ持チ再ヒ来ラントノ約ニテ僕等四名ヲ残シ食尽クルモ猶帰リ来ラス餓死ヲ分トセリ

偶沖縄糸満村ヨリ夜光貝漁ノ為メ七人渡航セリ勘助等四人共ニ之レニ依頼シ着覇ノ上ハ船賃トシテ金二百円渡スヘキノ約ニテ旧五月八日丸木(クリ) 船二艘ヲ一処ニ結ヒ之レニ乗り七昼夜ニシテ旧五月十二日纔カニ本港ニ着スルヲ得タリ然トモ船賃云々ニテ如此上ノ御扱ニナレリト

余其相貌ヲ一見スレハ乞食ト異ナルナク且ツ肉落顔色土ノ如シ余後ニ役所員ニ問フ彼四人者

鑑一文ナキ漂流人ニシテ二百円ノ大金ヲ約スルハ解スヘカラスト曰ク総テ球人ハ他府県人ノ状貌ノ如何ニ係ハラス金ハ必ス懐ニスルト思フナリ別ニ怪シムヘキナシト

更ニ無人島ノ情況ヲ問フ曰ク食糧欠乏ヲ患ヘ曾テ唐芋ヲ植ヘタルモ鼠害ノ為メ皆無トナレリ胡馬島周廻一里余可ナリ樹木アリ飲水アリ外ニ二小島アリ一ハ七合位（方言則チ一里十分ノセヲ指テ七合ト云フ）一ハ半里位此二島ハ木モナク水モナシト

無人島胡馬島へアホウドリ羽毛採取のために雇われた花本某他3名が、迎いの船が来ないため餓死を覚悟していたところ、「たまたま夜光貝漁のために」糸満村より来島した漁夫7名に巡りあい、交渉の末に那覇に無事帰島したということであるが、当時の琉球諸島の島々の中でアホウドリが生息している島は尖閣諸島しかない。胡馬島が尖閣であることは明確であるが、注目すべきは糸満漁夫が刳船で尖閣諸島と沖縄本島とを行き来していたことである。

糸満漁夫が尖閣諸島を目指すようになったのはいつごろからなのか、正確なことは無論分からないが、少なくとも1890年には出漁していたことを示す資料が沖縄県立図書館にあるのでそちらも見てみよう。

以下、『八重山嶋に係ル書類 久場島』塙忠雄編著<sup>(11)</sup>より抜粋する。

久場島并ニ魚釣嶋へ渡航シタル糸満人ハ総計七拾八名・内訳：大有丸ヨリ三十二名、鰹船ヨリ二十六名、与那国ヨリ廿名。

内申書ニ添ヘテ該島ニ於テ収獲シタル夜光貝但シ殻壺個、寛永錢四枚ヲ差出シタリ。

（※付箋紙）十六日午後十一時出帆之大有丸便ニ而（出ズ）間ニ合ハズ依テ十七日午前宮古マデ穿舟ニテ差立タルモ終ニ至ルコトヲ得ザシト云。

明治廿三年四月十六日 属 塙忠雄 印  
所長（西常央） 印

特命ニ依リ上申案左ニ相同候也  
久場島并ニ魚釣島之義ニ付内申

久場島并ニ魚釣島之義ニ就而者曩キニ上申致置候処漁業ニ敏捷ナル糸満人ハ大有丸ヲ雇入レ航行シタル已後ハ石垣島并ニ与那国島ヨリ陸續渡航セシモノアリテ既ニ七十人以上ニ至リ現今ハ移住ノ姿ニシテ小屋掛ケ等ヲ為シ該島ニ衣食スルノ計画ト認メ候。依テ右人員ノ頭立チタルモノ食糧運搬ノ為帰航シタル糸満人某ヨリノ該島ノ概況聞書及ビ某ガ持帰リタル物品式点相添此段内申ニ及候也。

明治廿三年四月十六日 所長名 知事宛

大有丸というのは、沖縄県設置の際に交通の便を図るため政府より下賜された蒸気船である。糸満漁夫らがこれを雇入れ尖閣諸島まで渡島したというのは興味深い。また、渡島した漁夫の総数が78名に上ることや、与那国島までその活動範囲を広げていたことなども留意しておくべきだろう。

塙の報告には久場島、魚釣島各島の概況も記されているので、こちらも該当部分を以下に抜粋する。

久場島概況 糸満人某ニ聞書

○地形

一、周囲凡三里

一、島中ニ高キハゲ山アリ

一、地形岩石高屏低列恰モ馬齒ノ如シ

一、家屋周囲ノ屏壁トモミルベキ破損シタル石垣アリ

一、水沢ニヶ所アリ、其他処々湧水アリテ共ニ清潔也

一、本島ヲ離ル、一里許ノ離瀬ニ巖洞アリ、広サ三疊數余ニシテ粗材ノ床縁アリ、且ツ五尺余ノ蛇壱尾棲息シ昼夜床下ヲ離レズ、但人ヲ害スルノ模様ナシ

一、船舶ノ定繫場ハ本島ト離瀬ノ中間ヲ稍ヤ安全ナル処トス

○樹木（略）

○動物（略）

○水産物

一、夜光貝、鰻、鯉、シビ、赤ノリ、アホウドリ、ランケドリ

○海浜並ニ陸上ノ散在物（略）

魚釣島概況 全上

○地形

一、周囲凡壱里半許

一、地形恰モ鍋ヲフセタルガ如シ

一、島中岩石土壤相半ス

一、雜木繁殖ス

一、河流并ニ湧水ナシ

一、海浜ハ岩石兀突ス

○雜件

一、水産物ハ久場島ト異ナルコトナシ

一、船舶ノ定繫場ニ適スル場所ナシ

一、島中アホウ鳥其他水鳥最モ多シ

一、久場島ト魚釣島ノ中間ニ離瀬アリ、周囲二三合許ナリ、是亦断崖絶壁ナリ

水産物の項には確かに夜光貝が記されている。尖閣諸島について、過去の開拓期に人々がアホウドリの羽毛を採取したことや鰻節を製造したことはこれまでの研究で言及されているが、渡島初期の理由の一つに夜光貝殻の採捕があった可能性は低くないと筆者は推察している。なお、この文書には参考書類として、八重山島役所長西より県知事宛の伺書（内容は尖閣で漁業を試みるものが現れたため、島を同役所の所轄に編入したい旨の伺出）が添付されている。

先に挙げた、那覇港輸出統計の夜光貝殻輸出量のグラフの増減の背景を考えると、夜光貝を求めて沖縄の周辺離島を渡り歩く糸満漁夫の集団が見えてこないかと筆者は思っている。

夜光貝殻を求めて、糸満漁夫は周辺離島への進出と漁場の拡大を続けていったが、漁業技術の面に関してはどのような影響をもたらしたか、次の項で少し見てみたい。



## 6. 糸満漁夫と夜光貝殻、ミーカガン（水中眼鏡）の発明

これまでの河原田、松原、波照間某の報告でも触れていたが、夜光貝採捕はいたって単純であり、潜水して十数尋の海底より貝を拾うものである。だが、20 m 下の海底にいる夜光貝を見極めるのは簡単なことではないと思われる。この採捕については「孔あき屋久貝の話」仲原善秀著<sup>(12)</sup>、に具体的な様子が記されているので、以下に抜粋する。

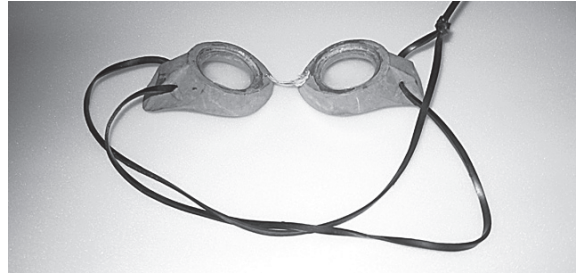


図1 沖縄の水の中メガネ「ミーカガン」

（※夜光貝を）御棒物や進上物という名目でも、蔵元（役場）で数量や期限を定めて村々に割当てたのだから、納める方では諸上納と同じく、これも上納物（ジョーノームン）、すなわち税と同じものであった。ところが困ったことに、この上納物は役所に納めたら翌日から悪臭を放ち、蒼蠅を誘い寄せるものであったから、割当てられたら早速納めるというわけにはいかず、期限ぎりぎりでも納めなければならないものであった。しかし期限が切迫してからそれを集めようとしても、割り当ての数を集めることは困難であった。それで平素から、採取次第口辺に孔を開けて海に飼って置いたのである。

屋久貝は外海に面した珊瑚礁の間に棲息し、潜らなければ採れない深みにいたから、海眼鏡のなかった頃の屋久貝採りは、けっして楽ではなかっただろう。波の静まった日の干潮時に、豚脂や魚脂を携え、貝のいそうな所にいってそれを流し、波の小じわを消して水底の貝の所在を見届け、それから潜って行って手探りでつかみ採ったのだというが、一個も見つけ得ない日もあったという。干潮時といってもサザエや屋久貝が採れる所は外海に面した所で、俗にンナヒリズー（貝拾い汐）といわれる3、4月頃の、波のない日で、しかも屋久貝は潜らなければ採れない深みにいるものであったから、春先きのまだ寒い日などは、上がってきた時に温めてやる海ブクターなど持って、夫婦で出かけたのだとある老人は語った。

海眼鏡とはいわゆる水中メガネのことであるが、沖縄では明治14-19（1881-1886）年頃に玉城保太郎という1人の糸満漁夫が発明したものとされている（図1）。沖縄では海が穏やかなことを「アンダナギ（あぶら風）」と言ったりするが、ミーカガンの発明以前は実際に海面に油を流し入れ波の揺れを抑えつつ、海底の夜光貝を探したというのである。

仲原の報告以外にも例があるのでそちらも見てみたい。『糸満市史民俗編』の「生業 水眼鏡職人の項」<sup>(13)</sup>より抜粋する。

### ②八重山での伝承

石垣市新川には、玉城氏の記述と関連する説話が伝わっている。明治40年（1907）頃から、八重山で採貝業者の網元をしていたという新川在屋号ナガンニグワー（長嶺小）家の古上原氏（明治33年生）の話をまとめると次のようになる。八重山の糸満漁民がクガドゥン（古賀辰四郎邸の意）に売る夜光貝を取り初めの頃は、ミーカガンはなかった。そのため、海面にサバアンラ（ふか油）を落として油の面を透かして水中を覗き、海底にある夜光貝を探し求めていた。しかし、必要に迫られて、四角の枠に板ガラスをはめ込んだ箱形のハクカガン（箱型

海中覗き眼鏡)を考案し、これによって水揚げの実績を上げた。更にこれを水中でも自由に透視できるように工夫を重ね、遂に実用的な漁具に完成させたのがミーカガンであったという。

以上2点の記述を元に考えると、夜光貝の採捕に際して当初は、サバアンラ(ふか油)を海面に流すという方法だったが、その後ハクカガンで海面から覗き見る、更にはミーカガン(水中眼鏡)を装着して潜るという方法に変遷していったようである。すなわち夜光貝採集の必要からミーカガンが生まれた。そして八重山の糸満漁夫における夜光貝殻の取引相手は古賀辰四郎<sup>(14)</sup>という人物であった。知っている方も多いと思うがこの古賀は尖閣諸島の開拓者である。

ミーカガンの発明者である玉城保太郎、糸満漁夫の間ではその屋号から「ナビサ」と呼ばれていた人物であるが、このナビサと古賀辰四郎の関係についても折角なので少し触れておきたい。まず、資料によればナビサと古賀は互いに商売相手であった。懇意にしていたようである。明治34(1901)年に奄美大島から沖縄本島にかけて棘皮動物の標本採集行を実施した動物学者箕作佳吉は「動物学雑誌」に『奄美大島嶋及沖縄採集旅行記』<sup>(15)</sup>を連載したが、同誌より以下に該当部分を抜粋する。

「奄美大嶋及沖縄採集旅行記」(第三) 箕作佳吉(明治36.11/15 15巻181号)

(※明治34年4月10日の日記)

(前略) 古賀氏黒岩氏も來着し居りたり」鍋作(ナビサ)なる者(第五版寫眞第五) 古賀氏の命により昨日より捕獲に従事し、得たるナマコ、メハヤ(大島名アヤミシキリ)二疋、シビー一疋を持ち來る是は大なる獲物なりき鍋作(ナビサ)とは屋號にて本人の名は玉城(タマグスク)太郎と云う由なれども人々彼を單に鍋作鍋作と呼び本名を言うものなし常に古賀氏に出入する水産業者にて理のよく分る男なり我々の望む所をよく了解したる後には最も熱心に捕獲に従事し同人の力に依りて獲たる者甚だ多しとす、我々は彼を「沖縄の熊」と呼ぶに至れり」(略)。



図2 動物学雑誌に掲載されたナビサこと玉城保太郎(箕作佳吉撮影1901)

文中黒岩氏は当時沖縄県師範学校教諭黒岩恒、ナビサこと玉城太郎は玉城保太郎である<sup>(16)</sup>が、ナビサは「常に古賀氏に出入りする水産業者」として紹介されている(図2)。

こうして資料を見ていくと、夜光貝殻は河原田が期待した通り、確かに海外輸出品として有効であった。だが、その資源量は無限のものではない。糸満漁夫を中心とする採捕者は夜光貝殻を求めて、久米島から八重山諸島に、更には遠く与那国島や尖閣諸島へと活動範囲を広げていった。漁業技術の点からも、更なる採捕の効率化のために「ミーカガン」という潜水用眼鏡を産み出した。

彼ら糸満漁夫がその能力を最大限に生かして夜光貝殻を乱獲できた背景には、採捕した貝殻を買い上げる商人の財力があった。特に八重山における夜光貝殻の受け入れ役は古賀辰四郎という寄留商人の名が挙げられる。

ミーカガンという当時としては画期的な発明に関しても、おそらくは寄留商人と糸満漁夫との結びつきの結果生み出されたものではないだろうか。筆者が2011年から2012年にかけて石垣島で聞き取

り調査をしていたころ、糸満をルーツに持つ地元の郷土史家の方<sup>(17)</sup> が所有する古老への聞き取りテープを聞かせてもらった。テープの1つはこの方の祖母から聞き取ったものだったが、その中で氏は祖母にミーカガンの材料であるガラスや、サバネの帆の材料となる帆布は当時の糸満でどのようにして手に入ったのか、と質問したところ、祖母は、当時そのようなものは「ナビサ」のところに行けば手に入った、と答えている。

夜光貝殻とは少し話が飛躍するが、前述の地元の郷土史家はまた、「貝殻採取が産んだ『ミーカガン+潜水技術+潜水集団』の条件に内地から輸入される『丈夫な漁網』という条件が加わり、アギヤー（廻高網）漁法<sup>(18)</sup> が発明された」のではないかと、話していた。アギヤー漁法は一網打尽の性格上漁場の枯渇を作り出し、糸満人は漁場を求めて県外、国外へと活動の場を広げていったと考えられる。

ミーカガンの材料のガラスはおそらく大量の貝殻を買い求めた商人がもたらした物だろう。貝殻の大量採集と輸出は資本の流入を産み、同資本を背景として導入された新材料は沖縄の漁業技術に近代的変革をもたらした。河原田が試みた夜光貝の海外輸出は、のちに様々な場所や人々に影響を与え、歴史を作ってきたと考え、そのような痕跡がまだ他に見つからないかと期待したくなる。

## 7. 他、資料、沖縄で試みられた貝釦製造など

明治36（1903）年7月27日付琉球新報2面「博覧会三等賞受賞者氏名」（第5回内国勸業博覧会）には、三等賞受賞者として「貝釦各種 那覇西 △古賀辰四郎」の記述が見られる。また、那覇において貝釦製造の計画があったことがうかがえる資料として、『貝釦製造に関する創立案』『横内家文書<sup>(19)</sup> 産業経済関係資料192』があるので以下に抜粋する。

横内家文書 産業経済関係資料192 ⑥-24 T3 貝釦製造に関する創立案  
貝釦製造ニ関スル創立案

- 一 資本金ハ二万円也トス
  - 此内訳 一 金二千元也 固定資本（器械購入見積高）
    - 一 金一万八千元也 流通資本
  - 一 出資金額ハ各自等分之事
  - 一 損益勘定ハ左ノ条項ニ仍ル事
    - 一 利益金ハ純益金高ノ百分ノ十ヲ正垣ニ報酬トシテ付与シ残額即チ百分ノ九十ハ正垣ガ六分、古賀ガ四分ノ割合ヲ以テ、毎年八月、十月、十二月、二月、四月、六月ノ六回之ヲ配当スル事（略）
  - 一 原料ハ需用ニ応ジテ総テ古賀ヨリ購入シ価格ハ大坂ニ於ケル各店其年一ケ年ノ平均相場ヲ標準トス
  - 一 正垣ガ那覇滞在中ハ手当トシテ一ケ月金壹百円ヲ受タル事（略）
  - 一 製品販売ハ各自努力シ利益ノ増進ヲ計ル事（略）
  - 一 本事業ノ拡張ニ付キ必要アル場合ニ雇吏、並使用人吏ノ選択採否ハ正垣ノ意見ヲ以テスル事
  - 一 本業ノ進歩発達ヲ計ル為メニハ器械ノ精選及購求ハ専ラ正垣ノ意見ニ依ル事
- 呼称ハ沖縄正古貝釦製造業ト称スルコト

だが、この貝釦製造の試みは『国吉ヨリ願ヘシ書類入・始末書』『横内家文書 産業経済関連資料 286』⑥-118 H277 国吉ヨリ願ヘシ書類入・始末書」を見ると成功したかどうか疑わしい。以下に抜粋する。

横内家文書 産業経済関連資料 286 ⑥-118 H277 国吉ヨリ願ヘシ書類入・始末書  
国吉ヨリ願ヘシ書類入 始末書

私儀去ル三月十一日正垣卯之吉大坂ニ向ケ出立致シ候。以後ハ貝釦製造ノ件ニ付キ同人ノ代理人ニ相立チ居リ候処、本製造ニ就テハ元料ナル貝殻ハ私方ニテ当地ニテ買入レ製造器具ノ内割○器ノ錐先并ニ鑪ト挽○用ノ庖丁ハ当地ニテ製造者ナク又販売所ナキ故、総テ大阪ナル正垣氏方ヨリ当工場ニ不都合ナキ振送付致候約束ニテ、中ニモ庖丁ハ同人当地出立ノ節ニハ大阪着次第早速送付致ス約束ニテ候ニ、其ノ後何タル事モ之ナク、前以テ手紙ニテモ知らせ五月五日ニハ電報モ左ノ通

キリサキホチヨ ハヤクオクレ スグヘン

先方ヨリノ返電左ノ通り

ミヤシカネヲクリ シュジンルス

其ノ後此方ヨリノ手紙ハ五月六日同十六日同二十二日ニ皆書留郵便ニテ道具差シ支ヘヲ知ラセ候処、鑪丈ケハ不都合ナク到来致シ居リ候ラヘドモ、庖丁ト錐先ハ如何ナル都合カ、到来致サズ為メニ現場ニハ五月二十四日ヨリ休業者ヲ生ゼシメ候ニ付翌二十五日ニハ亦電報左ノ通り

ホチヨモ キリサキモ ツキタ シゴトデキナイ ヘン

二十六日ニハ返電左ノ通り

三ガツスエヨリ ヒロセーコモウレン コマラスノカ

ト

此ノ如ク此方ヨリノ間ニ返事ハ全ク其ノ意ヲ得ズ、監獄ニテハ已ニ器具、機械ニ不都合ヲ生ジタルニ付キ代理人タル私ヲ呼び出サレタルガ、当時病氣ノ為メ呼出ニ応ジ得ザルノミナラズ、先方ヨリノ返電ニ困リ居ルニ正垣ノ保証人横内扶氏ニ不都合ノ節ハ何時タリトモ仕事ヲ中止サルルモ苦シカラズトス旨通知アリタル由ニ付キ同人ト相談ノ上五月二十八日ニハ電報左ノ通り

チュウシナンニチマデスルカ カンゴクノツゴウガアル スグヘン

然ルヲ右ノ返事トシテハ同三十日ニ至ルモ来ズ。私病氣モ漸ク快方ニ趣キ候ニ付キ監獄ニ出頭シテ官報ニテ何分ノ事問合ヲ願ヒ候処、早速官報ヲ発セラレシニ返電ニハ

二八ニチ ナハニタツタ

トノ由ニテ、其後大阪ヨリハ二十八日ニ大島丸、薩摩丸、六月二日ニ大和入港致シ候ラヘドモ、何ノ品物モ送り来ズ。先方五月二十四日發六月二日着ノ手紙ニハ庖丁、錐先等ハ沖繩丸（六月六日入港）便ヨリ送付致シ正垣本人モ近々参ルトノ旨申来リ候。

右之通りニ御座候江バ先方ヨリ送付ノ器具到着スルカ又ハ本人到来致シ候マデハ休役サセラレ候トモ、私代理人ニ於テハ所詮致シ方之レナク候、依テ始末書此ノ如クニ御座候也。

明治三十八年 月 日

那覇区字泉崎 千八百八十八番地 国吉 良広

始末書を見るに、失敗の原因は明確である。貝釦製造に必要な器具（庖丁・錐先）を沖縄では生産できないため、一旦器具が破損した場合大阪から取り寄せなければならない。

なお、古賀はこの年尖閣諸島魚釣島での鯉漁を試みて、そちらは成功を収めており、その後は尖



閣での鰹漁と鰹節製造に力を注いでいるため、貝釦の製造はこの失敗で一旦諦めたのかもしれない。

なお、大正期は石垣島で貝釦製造を再開したようである。以下に 1918 年 4 月 15 日付先島新聞「貝釦の製造」を抜粋する（図 3）。

### ○貝釦の製造

古賀商会支店で、峰岸支配人の監督の下に、榮螺の貝殻釦を製造してゐる、其器械が十台据えであるが、職工不足の爲め六台動いている、そして鋼鉄の錐様の齒のある器具を貝殻に当て、足踏器械でグルグル回はすと、其貝が速座に円形に載れて下へ落る、貝の全体に厚薄があつて、薄い所は速く截れる、又その形に大小があるんだ、一台に付き一日三千八百二十個、乃至三千五百個が普通の仕事ださうな、けれども今の所では漸やく千八百個位いで、六台の仕上個数は一万個位である、拙劣職工であると直き器具を損じ、夫れが爲めに鑪で齒を立てるのが数回で、一個二十銭の鑪が一日で其用をなさなくなるさうな、であるから工賃を遣った上に、時間と器具との損害を加へれば差引得る所がないどこか大損になる訳だ、けれども追々進歩して、今では仕事も捗り鑪も三日は保つさうな、そして工賃は一日一人五十銭、四十五銭、三十五銭、二十五銭、二十銭の等差である、で、如何しても一人二千五百個製造しなければ引合ないさうな、乃で賃銭は製造した個数で、其多寡に依つて遣る事に定たら宜からう、さうすれば自然競争して勉強するではないかと訊づねたら、実は然うしたいのである、内地では個数制度で千個に付き二十五銭、二十三銭、二十銭の割合で工賃を支払う定である、処が当地では其れを嫌ふさうな。

僕は一々調査して甚だ不快の感を惹起した、八重山で何か事業を企だてても、八重山人の如き遊惰な人間を相手にしたら、到底仕事は出来ない、畢竟高い賃銭ばかり損をして仕事は進歩ない、個数制度を嫌ふのも、己れの技倆が鈍く且つ怠惰（なまけ）て居るからだ、チト自覺せよ

先島新聞記者の主観は置いておくとして、原料は榮螺の貝殻ということなので、それより高価な夜光貝、高瀬貝、真珠貝等は貝殻のまま輸出していた可能性があるが、これは当時の八重山で製造される貝釦の完成度の問題を考えてみないといけないだろう。

なお、「沖縄県統計書」にはこの古賀支店における貝釦製造はカウントされていない。古賀商店

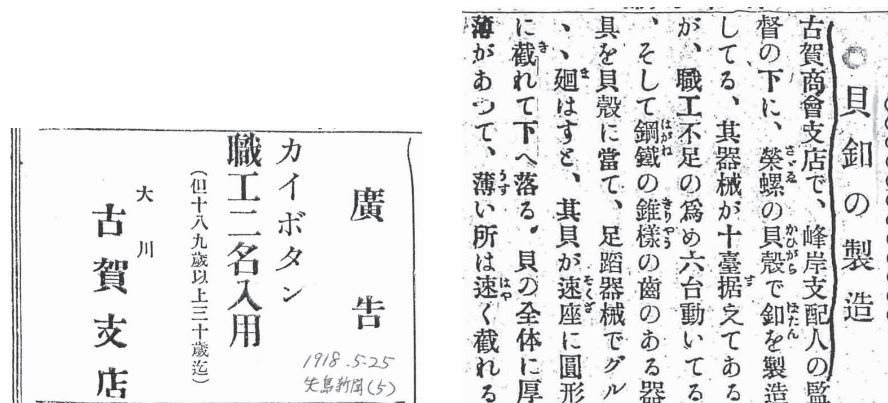


図 3 先島新聞記事。左：古賀支店広告（1918 年 5 月 25 日先島新聞）。右：新聞記事「貝釦の製造」（1918 年 4 月 15 日先島新聞）。

という海産物業者で扱う物品の一つとして其他雑貨に含まれたのだろうか。

なお、同統計書では別に 1927 年から 1931 年までの 5 年間、那覇市において貝釦製造業を行った業者が 1 戸いたことが記されている。

古賀商店の業務を戦後引き継いだ南海商会という貿易会社についても触れておきたい（図 4、5、6、7）。南海商会とは戦前古賀商店に勤務した照屋清栄（八重山支店支店長）、日高栄次郎（那覇本店勤務）の 2 人が設立した海産物貿易商である。屋号は㊦（照屋と日高の 2 人を意味する）、八重山大川に本店を置き、那覇泊高橋に支店を置いた。

「沖縄商工名鑑 1958 年版」には以下の通り紹介されている。

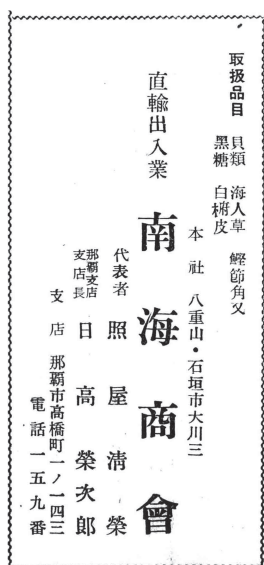


図 4 南海商会広告（沖縄商工名鑑 1958 年版）

（株）南海商会 八重山石垣市大川 支店那覇市高橋町 （創立）1951 年 2 月 （資本金）500 万円 （営業種目）輸出入貿易商 （輸出）貝殻、海人草、角又、鯉節、海苔、白樹皮、パイナップル罐詰、黒糖 （輸入）略 （役員）略 （沿革）戦前海産物問屋古賀商店の八重山出張所長として照屋清栄氏が海産物の買付業に従事していたが、戦後は照屋氏個人で南海商会を創立業務を継承、1955 年 9 月株式会社に改組（略）

（業況）八重山群島に於ける貝殻（高瀬貝）の水揚げは年間 5000 万円に達しているが其大半は当商会の取扱いになっている。海産物問屋として本商会の名はニューヨーク其他世界的に知られている（略）

石垣島で年配の漁業者から聞き取りをすると、南海商会へ貝殻を売りに行ったり、漁具の材料となる孟宗竹を買いに行ったりという話をしてくれるが、現在この商会はなくなっている。

商工名鑑の説明通り、同商会は貝殻取引商としては沖縄で老舗であり、信頼も厚かったようである。中尊寺金色堂修復のための夜光貝殻を沖縄から送るにあたって、琉球政府文化財保護委員会より、同商会は委託を受け貝殻を集荷している。

「沖縄の夜光貝 国宝中尊寺へ」1963 年 8 月 28 日付八重山毎日新聞記事を以下に抜粋する。

#### 沖縄の夜光貝 国宝中尊寺へ

岩手県平泉町にある修復中の中尊寺内の国宝金色堂内壁を飾る夜光貝は沖縄から取り寄せることになり、文保委の依頼で貝類輸出商南海商会（社長日高栄次郎氏）が集めていたが注文の五百個がそろつたので、二十六日文保委員長宮里栄輝氏、主事多和田真淳氏が同商会を訪れ品物を点検、確認した。

夜光貝の注文にはさる五月中旬中尊寺執事長佐々木実高氏が来島、琉球政府と文保委に協力を求めているもの。文保委の依頼を受けた南海商会では、本島、八重山、離島の久米島、粟国、渡名喜などから送られてくる夜光貝から①重さが 1.2 キロ—1.3 キロ、②ムシ食いや死臭でないものという条件に合うものを選びわけて集めていた。五百個集まるのは十月までとの期限付きだったが、南海商会では八重山本社からも百個余りを取り寄せ期限よりは早くなつたという。

五百個は政府の品質検査もすみいつでも出荷できる状態にある。文保委が中尊寺と連絡をと

り、夜光貝を送り出すことになっている。

値段は1キロ約1ドル50セント、五百個でだいたい六百キログラム余りとみられ、九百余ドル。

※南海商会関係写真

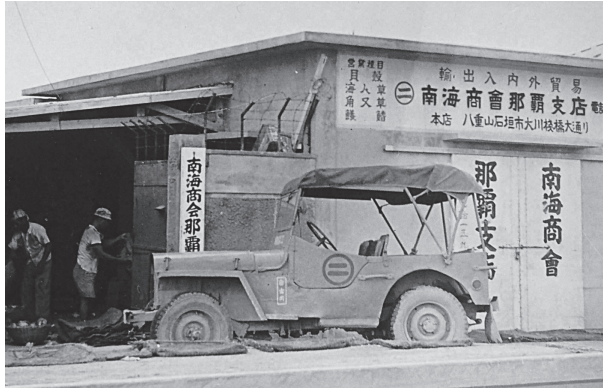


図5 南海商会那覇支店（泊高橋）右写真の左端が那覇支店長日高栄次郎（旧古賀商店店員）

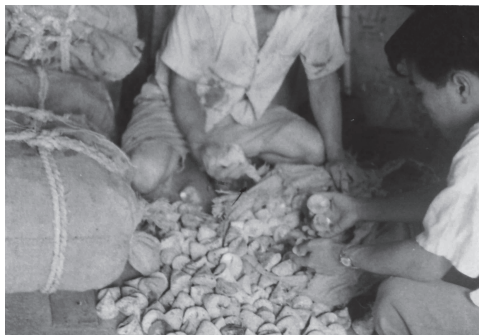


図6 貝殻検査の様子、右写真の右側が夜光貝、左側が高瀬貝と思われる。



図7 石垣市商工祭りにおけるパレードに参加した南海商会山車と従業員関係者一同。



## 8. 小結

この研究ノートは2015年3月16日沖縄県立芸術大学の河原田盛美に関する会合で発表した「明治以降の沖縄における輸出品目としての夜光貝、高瀬貝等の貝殻について」に加筆修正を加えたものである。論点を絞って資料を整理できないかと思うが、残念ながら筆者の力不足があり、結論を提示できないままだが、締めくくりとさせていただきたい。

「沖縄物産志」夜光貝の項をみるに、河原田は1875年頃、沖縄に押し寄せる維新—近代化—の波とともに来琉したが、1879年の沖縄県設置後、糸満人を代表とする漁業者は文字通りその洗礼を正面から浴びた者の1人ではないかと思われる。

夜光貝殻を取り巻く、糸満漁夫や古賀辰四郎に代表される寄留商人たちを惹きつけたものは言ってしまうと「お金」であることに疑いはない。本稿で紹介した資料は、それぞれが工夫をこらしてお金を稼ごうとする様を表していると言ってもいいだろう。「沖縄県統計書」を見ていくと、夜光貝が枯渇しほとんど採捕できない時期に、シャコ貝殻が貝殻の漁獲高1位（無論取引価額も1位である）を占めている時期が見受けられるが、どのような用途でなのか「???」現時点の筆者には全く想像もつかないが、お金になる用途を誰かが見出したのは確かであろう。貝殻を巡っての人々の努力や苦労が更に見出していけたら、研究も楽しくなるように思う。

## 注

- (1) 「沖縄文化研究 35」 pp. 143-170 2009/3/31 法政大学沖縄文化研究所
- (2) 沖縄県立図書館蔵（複写本）
- (3) 1876/5/10-11/10 米国フィラデルフィアで開催された万国博覧会
- (4) 「琉球漫録」 pp. 35-36、に「本年（1878年）五月某日右大臣正二位大久保利通公ノ凶訃藩地ニ至ル、六月廿内務省出張所長陸軍中佐兼内務省少書記官木梨精一郎祭主トナリ波上岬ニ於テ吊祭ヲ設ク」とあるが、出席者に「鹿児島商人垣田孫太郎、谷口栄吉已下数十名正立ス」として谷口の名が記されている。
- (5) 沖縄県立図書館蔵、同館ホームページ貴重資料デジタル書庫で画像閲覧可
- (6) 沖縄県立図書館蔵（複写本）
- (7) 国立国会図書館 近代デジタルライブラリより1883-1897年までの「大日本外国貿易年表」を閲覧、夜光貝殻に関する貿易統計を使用した。
- (8) 石垣市立図書館蔵（複写本）
- (9) 沖縄県立図書館蔵 塙忠雄（温故学会）旧蔵
- (10) 石垣市立図書館蔵（複写本）。冒頭に「農商務技手原熙ヨリ取調事項依頼之件有別紙取調書左案ヲ以テ御送付相成可然哉相伺候也」とある。なお「庶務書類綴上巻」は1893年に来島した笹森儀助依頼の取調事項を八重山島役所がまとめたもの。
- (11) 沖縄県立図書館蔵 塙忠雄（温故学会）旧蔵 同館ホームページ貴重資料デジタル書庫で画像閲覧
- (12) 「久米島の歴史と民俗」仲原善秀著 p 143
- (13) 「糸満市史」民俗編 p 130
- (14) 古賀辰四郎は現在の福岡県八女市宇山内の出身である。古賀の履歴によれば1879年に来沖し那覇西村に古賀商店を構える。1882年には八重山石垣島大川に古賀支店を設け、貝殻を中心に沖縄の海産物を内地へ送り同県有数の実業家として活躍した。1896年に沖縄県より尖閣諸島開拓の認可を受け同諸島の開拓に尽力。1918年8月28日没。
- (15) 「動物学雑誌」第15巻176号-第15巻182号。1903年6月15日-12月25日
- (16) 『父・玉城保太郎を語る』長田文著「青海」81号による。
- (17) 両親共に糸満漁夫をルーツに持つ故金城五男氏。2014年死去。筆者が聞かせてもらった当時聞き取りの相手はすでに故人になっており、明治大正期の糸満漁夫を中心とした八重山に関する内容も多く、貴重な体験であった。なお、テープは親族が継承していると聞いている。
- (18) アギヤー（廻（まわし）高網（たかあみ））、明治の中期（25-26年）頃に考案された大型の追込網漁。大人数が潜水し、海中より魚群を追いつまむ事で附近の魚を根こそぎ漁獲する糸満独特の追込漁。
- (19) 那覇市歴史博物館蔵（複写本）